キャラクター名
芥生蓮人

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ブラム＝ストーカー	ワークス	暗殺者	カヴァー	しがない浮浪者
オプショナル		年齢	25	性別	♂
覚醒	渇望	衝動	加虐	初期侵食率	32 %
出自	兄弟	経験	戦いの日々	邂逅	借り：ヨハン

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	1			2
感覚	2	1	1	1		5
精神	2	0	0			2
社会	3	0	1			4

HP	26
行動値	12
(非装備時)	12
戦闘移動	17
全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	3		ＲＣ			交渉		
回避			知覚			意志	2		調達	1	
運転：大型二輪	2		芸術：			知識：急所	2		情報：裏社会	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
アサルトライフル	射撃	5r+3	0	9		
断罪の銃弾	射撃	5r+3	0	10		侵蝕値7。ライフル＋痛＋罪＋コンセ。
断罪の銃弾@60	射撃	6r+3	0	10		
断罪の銃弾@80	射撃	7r+3	0	10		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
Dロイス：対抗種	P	N		
星 トウマ	P 同情	N 不安		
弟	P 懐旧	N 不安		
天乃 創一朗	P 信頼	N 不安		
久木官	P 好奇心	N 不信感		
立木カエデ	P 同情	N 不安		
ロビーザラビット	P 敵対心	N 憤懣		

最大財産P: 10	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト：ソラリス	2	2	メジャー	ー	ー	ー	ー	
効果：	C値をーLV							
甘い芳香	3	4	セットアップ	視界	範囲	自動	ー	
効果：	ラウンド間、対象の行動値をー[LV×2]							
痛みの水	1	2	メジャー	視界	単体	対決	ー	
効果：	攻撃力＋LVの射撃。ダメージを与えた時「放心」を与える。							
罪人の枷	3	3	メジャー	武器	単体	対決	ー	
効果：	組み合わせた攻撃が命中した場合、そのラウンド間対象の判定の達成値をー[LV×2]							
滅びの一矢	2	2	メジャー	武器	ー	対決	ー	
効果：	組み合わせた射撃攻撃のダイス＋[LV＋1]個、HPー2点。							
声無き声	1	ー	メジャー	視界	シーン	自動	ー	
効果：	今俺は、お前の脳裏に直接話し掛けている							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

あざみ れんと
バンダナライフル。lie luck 反転した幸運。

なにかを守ろうとしていたことはうすぼんやりと覚えている。
だがそれは遠い記憶で、重い蓋をした、忘れ去るつもりの過去だ。
今はただ金を欲していた。何故、何のためか？理由などどうでも良かった。
自分の行動の結果で何がどう変わろうと、さしたる興味もない。しっぺ返しすら気にも留めていない。

仕事柄、意味の分からないオーヴァードというものに接する機会もあった。
現実味はなく、ただ漠然と、こいつらと正面から殺り合ったら勝ち目はないのだろうということだけ感じていた。
なら、自分がその力を手にしたらどうだろう。
自在に毒を操れるようになった頃から、FHの依頼を受けるようになった。
彼らにしてみれば末端の末端、要員すら割きたくない些細な仕事だったのだろう。
それでも「人間」だった自分からしてみれば、リスクと払いが良い意味で釣り合わず都合の良い仕事だった。
かき集められた子供たちがひとり消えふたり消え、残った者たち同士で殺し合いをさせ、そうして強力なオーヴァードを「造り出している」と知るまでは。
幾人もの人間を屠ってきた自分が、何を言っているのだろうか。何を言える資格があるのだろうか。
それでも———古傷が抉られ、疼くことを止められなかった。
いつしか自在に血を操れるようになり、これが罰なのかと、諦めを持ってFHに手を貸すのを止めた。

誰かを、何かを守る資格などとうにない。
子供の泣き声が、助けを呼ぶ声が、慕ってれるにこやかな笑顔が、脳裏にちらついて離れない。そうだとしても。